

# 青年期における恋愛様相モデルの構築

高坂康雅 KOSAKA Yasumasa

- はじめに
- 恋の特徴と愛の特徴
- 恋愛様相モデルの構築
- 今後の展望

【要旨】本研究の目的は、西平（1981）の“恋と愛の二元的一元性”論を参考に、恋の状態と愛の状態とは質的に異なる状態であり、恋愛とは恋と愛を両極とした次元上の中間の状態であり、両者の特徴をあわせもった状態である捉え、先行文献をもとに青年の恋愛関係を図示するモデルを作成することであった。先行文献をまとめた結果、恋には、“相対性”、“所有性”、“埋没性”という特徴があり、愛には“絶対性”、“開放性”、“飛躍性”という特徴があること、相対性と絶対性、所有性と開放性、埋没性と飛躍性はそれぞれ対応する特徴であることが考えられ、これらをまとめた恋愛様相モデルが構築された。今後は恋愛様相モデルを実証的に検討する必要があると考えられた。

## —はじめに

本研究の目的は、恋と愛とを質的に異なる次元上の現象としてとらえ、両者の特徴を明らかにすることで、青年期の恋愛の様相をモデル化することである。

恋愛は青年にとって重要な関心事のひとつであり、実際、多くの青年が異性に想いをよせ、親密な関係を構築している。例えば、日本性教育協会（2007）の調査では、大学生の80%程度がいままでに異性とデートしたことがあると回答している。このように恋愛は青年にとって身近な現象であるが、「恋愛とは何か」、より具体的には「恋愛関係とはどのような関係か」について明確に論じることは、Spranger（1924 土井訳、1973）が“恋愛を定義することはやっかいな問題”であると述べているように、大変困難であり、この問いに答えるような論究・研究も少ない。この問いに答えることが困難な理由として、恋愛関係は常に一定ではなく、変化する関係であるということがあげられる。落合・佐藤（1996）は青年の発達に伴う親子関係の変化を明らかにしているが、恋愛関係も交際期間などに伴っ

てその関係性が変化し得るものである。さらに、恋愛関係では、親子関係ではみられない関係の解消（失恋）が存在し、より親密になっていく変化と解消に向かう変化の双方向を捉えられなければならない。これらの点を考慮しなければ、恋愛という現象や恋愛関係という関係を把握することは困難である。

恋愛に関する古典的な研究であるLee (1973) のラブ・スタイル (Love Style) 理論は、その理論の鮮麗さと明快さから、国内外の恋愛研究でも、頻繁に用いられる理論のひとつである。Lee (1973) は、愛に関する歴史的、文学的文献の分析と、愛情史カード分類法を用いた面接調査から、愛を、恋愛こそすべてであると捉える「エロス」、恋愛をゲームのように楽しむことと捉える「ルダス」、激しい感情はなく穏やかな友情的恋愛を表す「ストロイ」という主要な3類型と、恋愛を手段として捉える「プラグマ」、見返りを求めず自己犠牲も厭わない「アガベ」、独占欲が強く、嫉妬や執着を伴う「マニア」という副次的な3類型という6つのラブ・スタイルに分類している。Hendrick, Hendrick, & Adler (1988) は、30組のカップルの交際の継続状況とラブ・スタイルとの関連を検討した結果、交際が継続していたカップルは解消したカップルよりもエロス得点が高く、ルダス得点が低いことを明らかにしている。この研究から、ラブ・スタイルは恋愛関係の解消についても言及できる理論であるといえる。しかし、この理論では、個人が異なる相手との間で異なるラブ・スタイルを展開することが可能であると考えられており、その点で類型というよりも特性的である。つまり、個人の恋愛に対する態度を明らかにすることが目的であり、恋愛関係という関係性を記述するものではないと考えられる。これは、ラブ・スタイル理論に基づいて作成されたLove Attitude Scale (LAS; Hendrick & Hendrick, 1986) や Lee's Love Type Scale 2nd version (LETS-2; 松井・木賊・立澤・大久保・大前・岡村・米田, 1990) が、恋人がいない者でも回答できるようになっていることから推察される。また、和田 (1994) は恋愛に対する態度について分析し、恋愛をロマンティックなものとして捉える「恋愛至上主義」、恋愛を結婚につながる実利的なものとして捉える「結婚への恋愛」、恋愛はどんな障害にも打ち勝てるという信念を表す「恋愛のパワー」、理想的な恋愛を求める「理想の恋愛」という4因子を抽出している。和田 (1994) も恋愛関係という関係性を捉えるのではなく、個人内特性としての態度を捉えている点で、Lee (1973) のラブ・スタイル理論と類似した研究である。

またSternberg (1986) の提唱した、愛は親密性、情熱、コミットメントという3つの要素で理解されるという“愛の三角理論” (The triangular theory of love) も、国内外の恋愛研究で用いられる理論のひとつである。愛のこれら3つの要素は様々な愛情関係においてどの程度見られるかという点で異なっていると指摘されており、親密性は、親や兄弟姉妹、恋人、親しい友人など、多くの愛情関係で高く見られる要素である一方、情熱は恋愛関係に限って見られ、コミットメントは子どもとの愛情関係では極めて高いとされている。また、恋愛関係の初期では情熱的要素が強く、次第に親密性的要素が強くなり、その後、コミットメント的要素が強くなる一方、情熱的要素は弱くなるということが指摘されている (Sternberg, 1986)。

愛の三角理論は、恋愛関係に限定した理論ではないが、対象を限定して、その対象との関係性を論じており、また3つの要素が恋愛関係の進展により変化することを指摘している点でも、ラブ・スタイル理論よりも恋愛関係という関係性を論じることが可能であると考えられる。しかし、他の関係性(親子関係、兄弟関係)も同時に説明しようとする理論であるため、関係の解消、排他性、浮気など恋愛関係特有の現象を説明できるかについては疑問が残る。

松井(1990, 1993, 2000)は、青年期の恋愛行動に注目し、恋愛関係の進展度を5つの段階に分類している。この一連の研究は、行動という観点から「恋愛関係とはどのような関係か」を説明しようとした研究であると考えられる。しかし、恋愛関係が進展していく、より親密になっていく方向性は示されているものの、関係の解消に向かう方向性が示されていない。

松井(1990 他)のように恋愛関係の中で生じる行動ではなく、恋愛関係の中で生じる感情や心理的な変化に着目した論究や研究がある。例えば、詫摩(1973)は青年が恋愛することによって生じる心の変化として、①相手を美化する「結晶作用」、②相手と同じ行動を取るようになる「同調傾向」、③いつも相手のことを考えている「憑執状態」、④相手と二人だけの世界を作ろうとする内閉、⑤恋愛中に生じる不安や疑念を克服しようとする気持ち、⑥恋愛を通じた人間的成長、という6つを指摘している。高坂(2009, 2010)は、“恋愛関係をもつことによって生じたと青年が認知している心理的・実生活的変化”を“恋愛関係が青年に及ぼす影響”(以下、“恋愛関係の影響”)として捉え、恋人のいる大学生を対象とした調査から、「自己拡大」、「充足的気分」、「他者評価の上昇」、「時間的制約」、「経済的負担」、「他者交流の制限」、「関係不安」という7因子を抽出している。大野(1995)は、大学生のレポートを分析し、Erikson(1950 仁科訳, 1977 他)の理論をもとに、“親密性が成熟していない状態で、かつ、アイデンティティの統合の過程で、自己のアイデンティティを他者からの評価によって定義づけようとする、または、補強しようとする恋愛的行動”を“アイデンティティのための恋愛”と定義している。そして、“アイデンティティのための恋愛”の特徴として、「相手からの賞賛・賛美を求めたい」、「相手からの評価が気になる」、「しばらくすると、呑み込まれる不安を感じる」、「相手の挙動に目が離せなくなる」、「結果として多くの場合交際が長続きしない」という5つをあげている。

これら恋愛関係の中で生じる感情や心理的变化に着目した論究・研究では、青年が恋愛することには、ポジティブな側面(詫摩(1973)の⑥恋愛を通じた人間的成長や高坂(2009, 2010)の「充足的気分」など)とネガティブな側面(高坂(2009, 2010)の「時間的制約」や大野(1995)の「しばらくすると、呑み込まれる不安を感じる」など)の両面が存在することも示されている。西平(1981)は、対立した2つの特色を同時に持っている状態を「両極性(Ambivalence)」と呼び、愛(恋愛)を両極性をもつもののひとつとしてあげている。

恋愛が西平(1981)の指摘する両極性をもつ理由として、Fromm(1956 鈴木訳, 1991)の、愛について学ぶべきものは何もないと思こんでいる者は、恋に「落ちる」という体験と

愛に「とどまっている」という持続的な状態を混同しているという指摘は示唆的である。この指摘から、恋と愛とは質的に異なる状態像を示す言葉であり、恋愛という現象は恋と愛とが混在した状態を示すものであることが考えられる。恋と愛とが質的に異なる状態像を示していることは、“初恋”という表現がある一方、“初愛”という表現がみられないことから推察される。

西平 (1981) は、恋と愛とは質的に異なり、相反する状態を表しており、恋愛とは恋の状態と愛の状態が分かちがたく渾然とした状態を表しているとする“恋と愛との二元的一元性 (統一性)” (返田, 1986) という考え方を示している。つまり、恋愛とは、恋の状態と愛の状態を両極とした次元上の中間に位置する状態であり、恋の特徴と愛の特徴の両方が同時にみられる状態であると考えられる。西平 (1981) の“恋と愛の二元的一元性”に類する論究として、返田 (1986) は、恋はエロスの愛とほぼ同じであり、自分にとって魅力をもつものを手に入れ、一体になりたいという欲求であり、愛は相手の自由や独立性を認め、尊重しあうフィリア的愛に相当し、恋愛はこのエロスの愛とフィリア的愛とが結びついたものであると述べている。また、雨宮 (2008) は、恋には“self-centered love”という訳語を、愛には“self-transcendent love”という訳語をあて、恋と愛とを、自己—他者関係のあり方から比較している。これらの論究から、恋は恋愛関係の始まりであり、2者関係をより親密な状態に進める特徴がある一方、時間的制約 (高坂, 2009) や呑み込まれる不安 (大野, 1995) のようなネガティブな側面をもっており、対して愛は人間的成長 (詫摩, 1973) や充足的気分 (高坂, 2009) のようなポジティブな側面のみをもった状態であると考えられる。さらに、大野 (2000) は、恋の特徴と愛の特徴を比較し、“発達的に考えた場合、恋愛における心理力動も「恋」から「愛」的なものへの変化していく”と述べている。この指摘から、恋の状態から始まり恋愛関係を通して愛の状態に近づくという変化が推測される一方、恋がもつネガティブな特徴は関係を解消に向かわせる可能性ももっていることが考えられる。

このように、恋の状態と愛の状態とは質的に異なる状態であり、恋愛とは恋と愛とを両極とする次元上の中間の状態であり、恋の特徴と愛の特徴とが混在した状態であると考えることが可能であることが推察される。そこで、本研究でも、西平 (1981) の“恋と愛との二元的一元性”論に基づき、返田 (1986)、大野 (2000)、雨宮 (2008) などを参考に、恋の特徴と愛の特徴を対比的に明らかにし、青年の恋愛の様相をモデル化することを目的とする。なお、愛には、異性愛や同性愛、親子愛、師弟愛、自己愛、人類愛など、幅広い対象が想定される。本研究では、青年期の恋愛の様相を明らかにするという目的や、恋の特徴との比較を行うという方法などから、青年期において現実に存在する異性に対して向けられる愛 (異性愛) について論じることとする。

## ——恋の特徴と愛の特徴

### (1) 相対性 対 絶対性

恋の状態にみられる1つ目の特徴は“相対性”であり、これに対する愛の特徴は“絶対性”である。これは、返田(1986)や大野(2000)が条件性—無条件性として述べる特徴と一致する。

青年期になると、異性と親しくなりたい、恋人が欲しいという欲求が強まるとされている。しかし、親しくなりたい異性、恋人にしたい異性は誰でもよいというわけではなく、自分が魅力を感じる特性(容姿・能力・パーソナリティなど)をもっている異性に限られる。青年は多くの異性を比較しながら、自分が魅力を感じる条件を有している異性に対して、特別な感情を向けるのである。このことは、「なぜその人が好きなのか」という問いに対して、「かわいいから」、「やさしいから」と、相手の特定の側面をとりあげて説明することができることにも表れている。どの程度自身の条件に合致しているかが重要となっているため、条件に合致していれば、ますます魅力的に感じられる加算的な評価を行う。これは返田(1986)が指摘するエロスの愛と関わり、また詫摩(1973)の①結晶作用にも関わる特徴である。一方で、条件に合致しないところがみつければ、その異性に対する魅力は減少し、相手への想いは低減・消失し(いわゆる“幻滅”)、関係は解消する方向に進む。そこには、“恋する人間にとって他者は、原理的に代替可能な者として捉えられている”(雨宮, 2008)という考えが存在していると推察される。

このように、恋愛する対象を他の人や自身の条件と比べる“相対性”が恋の状態の1つ目の特徴である。

“相対性”に対し、愛には“絶対性”という特徴がある。“絶対性”とは、他者との比較を超えて、相手の欠点や短所も含めて、相手の存在を受容し、認めることである。返田(1986)は“相手が器量がいいから愛する、頭がいいから愛するのではなく、彼が彼であるから彼女が彼女であることを、その人がその人であることを受容し肯定してやること”が愛(フィリア的愛)であると述べている。自身の条件に合うかが問題ではなく、その人がその人であることが重要になってくる。そのため、愛する相手に新たな欠点(秘密にしていた過去や加齢に伴う身体的衰えなど)が見出されたとしても、その欠点すら愛する相手を構成する一部として認めることができるのである。

### (2) 所有性 対 開放性

恋の状態にみられる2つ目の特徴は“所有性”であり、これに対する愛の特徴は“開放性”である。

恋の特徴を強くもつ青年は、自身の条件にあった魅力的な異性とつきあいたい、恋人にしたいと思い、また独占したい、他人に渡したくないと強く感じ、実際に相手を物理的・

時間的・心理的に占有しようとする。このような“魅力のある異性を自分のものにして独占し、それと一体になりたいという心情”（返田, 1986）の生起が、恋の“所有性”であり、換言すれば、そのような占有を通して、相手の精神的なエネルギーを自分に向けたままにさせようとする試みである。そのため、常に相手の精神的なエネルギーが自分に向けられているか、他のものに相手の精神的なエネルギーが向けられていないかが、関心の中核となる。そのため、「相手の挙動に目が離せなくなる」（大野, 1995）という状況に陥ったり、2人だけの世界に閉じこもろうとしたり（内閉；詫摩, 1973）するようになると考えられる。また、相手が他の異性と接近・接触しないように距離をとらせる排他性や、距離をとらせるように相手の行動に制限をかける束縛、相手（時にはまだ恋愛関係にさえない片想いの相手）が他の異性と接近・接触しているときに生じる苛立ちやヤキモチなどは、“所有性”という恋の特徴によって生じる現象であると考えられる。

恋の“所有性”という特徴に対し、愛には“開放性”あるいは“無所有性”という特徴がある。Spranger (1924) は、愛を“自己のすべてを相手に与え、相手の喜びや成長や幸福そのものが、そのまま自己の喜びや成長や幸福につらなっている「無所有の原理」と定義している。また Fromm (1956) は“愛とはわれわれの愛するものの生命と成長に対する積極的な関心である”と述べている。返田 (1986) も愛について、“他者の生命、可能性といったものを伸ばそうとする”ものであり、“相手に対する献身、すなわち自分の身をささげ、自分の欲望や自由を犠牲にせずにはできないようなもの”であると述べている。これらの指摘のように、愛とは、相手の幸せや成長のために自らの精神的なエネルギーを与えている状態であり、しかも、そのような状態や相手の幸せや成長を自分の喜びとすること（“愛する喜び”；大野, 2000）ができる状態であるといえる。西平 (1981) は、このような愛を〈開いた愛〉と呼び、“所有性”としてみられる自己に関心をおいた〈閉じた愛〉と区別している。本研究では、西平 (1981) の〈開いた愛〉という表現を参考に、自身の関心や精神的なエネルギーが自身に向けられているのではなく、相手に向けられているという意味で、“開放性”と呼ぶこととした。

“開放性”の本質は、相手の幸福や成長のために自身の精神的なエネルギーを与えるという行為にあり、その結果生じる“愛する喜び”は副次的なものである（大野, 2000）。まして、相手から愛されることや相手から精神的なエネルギーを向けられることを期待して相手にエネルギーを与えることは、手段的に用いているという点で、“開放性”という特徴を有する愛の状態ではなく、“所有性”を有する恋の状態である。そのような相手からの返礼を期待することなく、ただ相手に自身の精神的なエネルギーを与えることが、“開放性”の本質である。その点で、“開放性”は自己否定的であり（返田, 1986）、Lee (1973) のアガペと類似した状態である。雨宮 (2008) も“真に愛する人間は、たとえ相手から手段とみなされようとも、そのことによって自らの存在が揺るがされることはなく、相手を愛するというまさにそのことによって、満たされるのである”と述べている。

### (3) 埋没性 対 飛躍性

恋の状態にみられる3つ目の特徴は“埋没性”であり、それに対する愛の状態の特徴は“飛躍性”である。

“埋没性”は、「恋に落ちる (fall in love)」という言葉のとおり、青年の生活や意識が相手や相手との関係に埋もれてしまい、そこから出られずに、何も手につかない状態を意味している。西平 (1981) が“埋没性”に関して、“恋愛というはげしい刺激のまえに青年たちは、家庭の幸福も、友情も、趣味も、常識も、すべての現実世界が、音をたててこわれていき、同時に、未来の社会的な出世や蓄財や名声へのあこがれも、ひどくあじけないものに思われてくるのを意識する”と述べているように、青年の生活や意識のすべてが相手や相手との関係を中心としたものになり、相手や相手との関係以外のものに対して、興味や関与が少なくなり、エネルギーを割かなくなることを意味している。これは、和田 (1994) が恋愛に対する態度の分析で抽出した「恋愛至上主義」にも関わるものである。より具体的には、恋人と一緒に過ごす時間を優先することにより自分の時間がなくなったり、生活のリズムが乱れたりすること（「生活習慣の乱れ」；高坂, 2010など）や、同性友人との関係が希薄化・疎遠化したりすること（多川, 2003）などがあげられる。

“埋没性”という恋の特徴に対して、愛の特徴としてあげられるのは、詫摩 (1973) が⑥恋愛を通じた人間的成長と述べたような、相手や相手との関係以外のものにより一層興味や関与が増し、挑戦や努力をするようになるという“飛躍性”である。返田 (1986) が“恋愛することによって世界全体の意味が変わり、世界や自己の新しい意味づけがなされる”と述べ、杉村 (2008) が“このような強い感情を伴う結びつきは、新しい考えや感情、何かをする動機、目標への目覚めへと導く”と述べており、2人だけの関係に閉じているのではなく、相手との関係を土台や基盤として、外の世界に向かっていこうとする姿勢が“飛躍性”である。この“飛躍性”については、高坂 (2009, 2010) の“恋愛関係の影響”では「自己拡大」という因子として、和田 (1994) の恋愛に対する態度では「恋愛のパワー」という因子として、それぞれ抽出されており、また、Aron, Paris, & Aron (1995) は恋愛開始前よりも恋愛開始後の方が自己概念が多様化していることを明らかにしているなど、実証的な研究でも、示されている。「○○ (愛する対象) がいるから頑張れる」という言葉があるように、愛しているがために、その相手との関係に固執するのではなく、積極的に外の世界に向かっていこうとするのである。

### ——恋愛様相モデルの構築

前節で論じたように、恋には、“相対性”、“所有性”、“埋没性”という特徴があり、愛にはそれぞれに対応する形で、“絶対性”、“開放性”、“飛躍性”という特徴があることが考えられた。恋の特徴と愛の特徴について、表1にまとめた。

次に、恋愛とは、恋と愛とを両極とする一次元上の中間に位置する状態であり、恋の特

徴と愛の特徴とが混在した状態であると考えをもとに、青年期の恋愛関係の様相を図示する仮説モデルを構築した(図1)。本研究ではこのモデルを恋愛様相モデルと呼ぶ。恋愛様相モデルでは、恋を“相対性”、“所有性”、“埋没性”という3点を結んでできる三角形で表し、愛を“絶対性”、“開放性”、“飛躍性”という3点を結んでできる三角形で表している。次に、恋の特徴と愛の特徴で対応するそれぞれの特徴を結んでできる三角柱を構成する。そして、恋の特徴と愛の特徴で対応するそれぞれの特徴を結んだ線上の3点(図1の点A、B、C)を結んでできる三角形が、現在の恋愛の様相を表している。具体的には、点Aは相対性—絶対性の線上にあり、比較的、相対性に近い位置にある。また、点Bは所有性—開放性の線上にあり、所有性に近い位置にある。ここから、相対性—絶対性、所有性—開放性という観点からみると、この恋愛関係は恋の特徴が強く表れている関係であるといえる。それに対し、点Cは埋没性—飛躍性の線上にあり、比較的、飛躍性に近い位置にあることから、埋没性—飛躍性の観点からみると、この関係は愛の特徴が強く表れている関係であるといえる。

また、恋愛関係は、恋の状態から始まると考えられることから、恋愛関係の最初期は、3つの線上の3点はいずれも恋を表す三角形の頂点と一致し(図1の点A、B、C)、そこから交際が進むにつれて、右方向に、しかし3点は独立に、移動することが想定される。

恋愛様相モデルの特徴として、恋愛の様相を、より親密になっていく変化と関係の解消に向かう変化の双方向を含め、恋愛関係を変動しうる関係として表していることである。松井(1990他)の恋愛行動の研究では、より親密な段階の行動をすると、それ以前の段階に戻ることができない、つまり関係の解消に向かう変化を説明することができない。それに対し、恋愛様相モデルでは、恋と愛の対応する特徴を結んだ線上の3点が愛の方に近づ

表1 恋と愛の特徴と関連する先行研究のまとめ

関連する先行研究	特徴の説明	恋	愛	特徴の説明	関連する先行研究
結晶作用 <sup>1)</sup> エロスの愛 <sup>3)</sup> 理想の恋愛 <sup>5)</sup> 「相手からの評価が気になる」 <sup>6)</sup> 条件性 <sup>7)</sup>	相手を他の人と比較したり、自身の条件に合致しているかで評価すること	相対性	絶対性	他者との比較を超えて、相手の欠点や短所も含めて、相手の存在そのものを受容し、認めること	フィリア的愛 <sup>3)</sup> 無条件性 <sup>7)</sup>
憑執作用 <sup>1)</sup> 内閉 <sup>1)</sup> マニア <sup>2)</sup> 排他性 <sup>4)</sup> 「相手の挙動に目が離せなくなる」 <sup>6)</sup> 関係不安 <sup>9)</sup>	相手を物理的・時間的・心理的に占有し、相手の精神的なエネルギーを常に自分に向けたまにさせようとする	所有性	開放性	相手の幸せや成長のために自身の精神的なエネルギーを与えること	アガペ <sup>2)</sup> 無所有性 <sup>3)</sup> 相互性 <sup>7)</sup>
同調傾向 <sup>1)</sup> 恋愛至上主義 <sup>5)</sup> 友人関係の希薄化・疎遠化 <sup>8)</sup> 生活習慣の乱れ <sup>9)</sup>	生活や意識の中心が相手や相手との関係になり、相手や相手との関係以外のものに対する関心や意欲が低下すること	埋没性	飛躍性	相手や相手との関係を基盤として、それら以外のものにより一層興味や関心が増し、挑戦や努力をすること	不安や疑念の克服 <sup>1)</sup> 人間的成長 <sup>1)</sup> 恋愛のパワー <sup>5)</sup> 自己拡大 <sup>9)</sup>

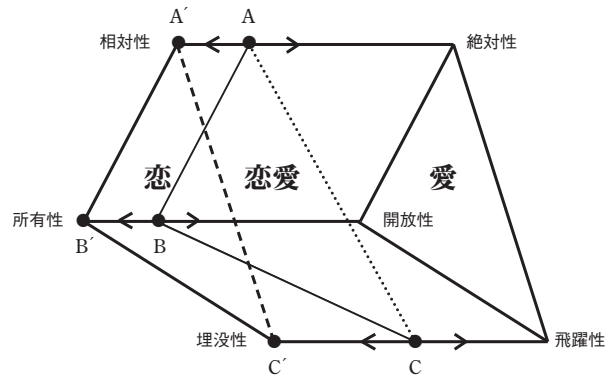
注1：関連する先行研究で付与した数字は、それぞれ下記の研究を意味する。

1) 詫摩(1973)、2) Lee(1973)、3) 返田(1986)、4) 増田(1994)、5) 和田(1994)、6) 大野(1995)、7) 大野(2000)、8) 多川(2003)、9) 高坂(2009, 2010)



くほど親密となり、恋の方向に近づくほど関係の解消に向かうことが想定されている。また、Lee (1973) のラブ・スタイルのように個人の特性としてではなく、恋愛関係をもつことによって生じる感情や心理的变化をもとにしているため、すべての青年にあてはまる恋愛の現象を把握することができる。さらに、Sternberg (1986) の

図1 恋愛様相モデル



“愛の三角理論”のように、親子関係や友人関係にも適用できるモデルではないが、恋愛関係に特化した分、恋愛関係の様相や進展を示すことができると考えられる。

以上のように、本研究で構築した恋愛様相モデルは、青年期の恋愛関係を、“相対性”、“所有性”、“埋没性”という3つの特徴をもつ恋の状態と“絶対性”、“開放性”、“飛躍性”という3つの特徴をもつ愛の状態との中間の状態に位置づけられるものであり、恋の特徴と愛の特徴を併せ持つ関係であることを、明確に図示したモデルであり、他の恋愛や愛に関する理論よりも青年期の恋愛の実態を、親密化や関係の解消も含めて、表すことのできるモデルであるといえる。

## ——今後の展望

恋愛様相モデルに関する研究の今後の展望としては、まずモデルについて、データに基づいて実証することである。恋と愛にはそれぞれ3つの特徴があり、恋の3つの特徴と愛の3つの特徴がそれぞれ対応しているということが実証されなければならない。また、恋愛関係をこの3つの特徴の対応関係で把握した際、愛の特徴に向かうほど親密になり、恋の特徴に向かうほど関係の解消につながることも検討する必要がある。さらに、表1のように、恋の特徴や愛の特徴それぞれには、関連していると考えられる先行研究で示されてきた恋愛関係で生じる感情や心理的变化が存在する。これらとの関連もあわせて検討することで、モデルの妥当性を示すことができるとともに、青年期の恋愛関係をより明確に表すことが可能になると考えられる。

また、恋愛関係は基本的に2者関係であるが、恋愛様相モデルは個人が恋愛関係をもつことによって生じる感情や心理的变化をもとに作成されている。つまり、相手の特徴や、相手の特徴に対する反応など、2者関係内の相互作用については考慮されていない。しかし、相手の特徴によって、個人の特徴が影響を受け、変化することが考えられる。例えば、相手が恋の特徴である相対性を強くもっていれば、自身は相手の条件にあうように振る舞い、また相手の条件にあっているかを気にするようになり、自身も相対性を強める可能性

がある。また、相手が恋の特徴である所有性を強くもっていれば、自身は時間的にも精神的にも束縛されているように感じ、「他者交流の制限」や「時間的制約」(高坂, 2010)、「呑み込まれる不安」(大野, 1995)を感じる事が想定される。今後は相手の特徴に対する反応や両者の相互作用も考慮した上で、モデルの拡張が必要になってくる可能性もある。

青年は人に恋をし、恋愛関係をもち、楽しいことや嬉しいこと、悲しいことや辛いことを経験する。時には相手との関係で大いに悩み、時には相手との関係があることが大きな励みにもなる。このように恋愛とは複雑な現象であり、恋愛をしている青年自身はもちろん、そのような青年に関わる者も、青年の恋愛について理解することは困難である。本研究で構築した恋愛様相モデルが、青年が自身の恋愛のありようを見つめ直したり、青年に関わる者が青年の恋愛を理解したりすることの一助となることが期待される。

#### 《引用文献》

- 雨宮 徹 (2008). 恋と愛—フランクルの「コペルニクスの転回」を手がかりとして— 大阪河崎リハビリテーション大学紀要, 2, 23-37.
- Aron, A., Paris, M. & Aron, E. N. (1995). Falling in love : prospective studies of self-concept change. *Journal of personality and social psychology*, 69, 1102-1112.
- Erikson, E. H. (1950). *Childhood and society*. New York: Norton.  
(エリクソン, E. H. 仁科弥生 (訳) (1977). 幼児期と社会 みすず書房)
- Fromm, E. (1956). *The art of loving*. New York: Harper.  
(フロム, E. 鈴木 晶 (訳) (1991). 新訳版 愛するということ 紀伊国屋書店)
- Hendrick, C. & Hendrick, S. S. (1986). A theory and method of love. *Journal of personality and social psychology*, 50, 392-402.
- Hendrick, S. S., Hendrick, C. & Adler, N. L. (1988). Romantic relationships: Love, satisfaction, and staying together. *Journal of personality and social psychology*, 54, 980-988.
- 高坂康雅 (2009). 恋愛関係が大学生に及ぼす影響と、交際期間、関係認知との関連 パーソナリティ研究, 17, 144-156.
- 高坂康雅 (2010). 大学生及びその恋人のアイデンティティと“恋愛関係の影響”との関連 発達心理学研究, 21, 182-191.
- Lee, J. A. (1973). *The colours of love*. Ontario: New Press.
- 増田匡裕 (1994). 恋愛関係における排他性の研究 実験社会心理学研究, 34, 164-182.
- 松井 豊 (1990). 青年の恋愛行動の構造 心理学評論, 33, 355-370.
- 松井 豊 (1993). 恋愛行動の段階と恋愛意識 心理学研究, 64, 335-342.
- 松井 豊 (2000). 恋愛段階の再検討 日本社会心理学会第41回大会発表論文集, 92-93.
- 松井 豊・木賊知美・立澤晴美・大久保宏美・大前晴美・岡村美樹・米田佳美 (1990). 青年の恋愛に関する測定尺度の構成 立川短期大学紀要, 23, 13-23.
- 日本性教育協会(編)(2007). 「若者の性」白書—第6回青少年性行動全国調査報告— 小学館
- 西平直喜 (1981). 青年の世界3 友情・恋愛の探求 大日本図書
- 落合良行・佐藤有耕 (1996). 親子関係の変化からみた心理的離乳への過程の分析 教育心理学研究, 44, 11-22.
- 大野 久 (1995). 青年期の自己意識と生き方 落合良行・楠見 孝(編)講座生涯発達心理学4 自己への

- 問い直し：青年期 金子書房 pp.89-123.
- 大野 久 (2000). 愛の本質的特徴とその対極 教職研究, 11, 1-10.
- 大野 久 (2010). 青年期の恋愛の発達 大野 久(編)エピソードでつかむ青年心理学 ミネルヴァ書房 pp.79-105.
- 返田 健 (1986). 青年期の心理 教育出版
- Spranger, E. (1924). *Psychologie des jugendalters*. Heidelberg : Quelle & Meyer Verlag.  
(シュプランガー, E. 土井竹治 (訳) (1973). 青年の心理 五月書房)
- Sternberg, R.J. (1986). *A triangular theory of love*. *Psychological review*, 93, 119-135.
- 杉村和美 (2008). 大学生の時期にやっておくこと—アイデンティティ形成の契機 宮下一博・杉村和美  
大学生の自己分析 ナカニシヤ出版 pp.49-79.
- 多川則子 (2003). 恋愛関係が青年に及ぼす影響についての探索的検討：対人関係観に着目して 名古屋  
大学大学院教育発達科学研究科紀要 心理発達科学, 50, 251-267.
- 詫摩武俊 (1973). 恋愛と結婚 依田 新・大西誠一郎・斎藤耕二・津留 宏・西平直喜・藤原喜悦・宮  
川知彰(編)現代青年心理学講座5 現代青年の性意識 金子書房 pp.141-193.
- 和田 実 (1994). 恋愛に対する態度尺度の作成 実験社会心理学研究, 34, 153-163.

---

[こうさか やすまさ・和光大学現代人間学部心理教育学科専任講師]